岩波文庫

417

方丈記

山田孝雄校訂

岩波書店

昭和三年一〇月一五日　第一刷発行
昭和一四年六月一五日　第一四刷改版発行
昭和四五年一二月一〇日　第四四刷発行

方丈記

定価★

校訂者　山田孝雄

発行者　東京都千代田区一ツ橋二丁目五番五号
岩波雄二郎

印刷者　長野市中御所二丁目三〇番地
田中忠

発行所　東京都千代田区一ツ橋二ノ五ノ五
株式会社　岩波書店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

法令印刷・桂川製本

岩波文庫

417

方丈記

山田孝雄校訂

解題

本書は鴨長明が日野山の閑居に於いて自己の感想を述べたるものにして、これによりて、吾人は作者の生活せし時代の狀態と作者の境遇及び性格とを察するを得るなり。

按ずるに作者の時代は天災地變ついで至りし時なるのみならず、歴史上の大轉回期にあたりたれば、社會上に種々の缺陥を生じ、人事の轉變また甚しきものありしなり。されば世の無常を觀じ厭世主義に傾く者の生じ易きはいふを待たず。而して作者はその社會に於いて輕き意味にて

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

の敗者としての境遇に立てりしものと認めらる。かくの如き内外の種々の事情は作者をして世を遁るるに至らしめしならむ。

作者は佛教の思想に基づきて、無常を觀じ、世を遁れたるものなれど、天を怨むるにもあらず、世を詛ふにもあらず、淡泊に世を離れて閑居し、消極的ながら自己の境地に一種の安慰を見出せり。さればその無常觀も厭世主義も共に徹底せざる觀あり。これ或は日本人が根柢に於いて樂天的なるのいたす所か。要するに本書によりて日本人の性格の消極的方面は或はあらはれたりとすとも積極的方面は恐らくは認め難き所ならむ。

本書は隨筆と稱せらるれども、首尾一貫せる一篇の文にして他の隨筆が斷片的に感想を述べたる小篇の集まりに過ぎざるものと同一に論じう

べきものにあらず。而して全篇を通じて些のゆるみなく、讀者をして卷を措くこと能はざらしむるものあるはその手腕の平凡にあらざるを見るに足る。惟ふに本書は長明が、一夕、今を思ひ昔を顧みて、感慨に堪へざるあまり筆を呵して、一氣に草し了りたるものなるべく、その文章に生氣ありて人を動す力に富めるも亦、これが、飣餖補綴の餘に出でしものにあらずして、一氣呵成の文たるが故なるべし。この書を評するもの、よくこの主眼點に眼を着くるを要す。

本書は隨筆中の異彩としてわが文學史上に光を放てるのみならず、その文體も亦わが文學史上重要なる地位を占むるものなり。この文體は所謂和文漢文融和の文體の先驅をなせるものの一として爾後日本の文章の

主なる潮流をなすに至れるものなり。この文體は上述の如く、漢文の特色を和文に混淆調和せる點に存するものなるが、本書の文體はよくこれに成功せるものにして、當時の同一系統に屬すべき海道記東關紀行等の文體に比して優に一頭地を拔けるものあるはこれこの作者の文才の偉大なるによるものといふべし。この文體は蓋し漢文の口調と敍法とを和文に應用したるものなるべきが、それが、生硬にも不調和にも感ぜられず、よく敍述の井然たると理路の明確なると聲調の輕快なるとありて、一言を以ていはば、簡潔の二字を以て評すべきものなり。而してこの特色は主として、漢文の聲調句法を善用したる點に存すといふべく、この特色の存することは、この作者の和漢の文章に精通せる學才が、その文才と

相待つてはじめて功を奏したるによるものなるべし。單に、漢文の故事熟語等を和文に混淆せるに止まる生硬なる文章と同日を以て談ずべからざると共に、本書が一氣呵成して成れる點とを顧みてこの文の古今に希なる名文たる所以をも首肯しうべきなり。

本書の底本

世に說をなすものありて方丈記を僞書とせり。この說の起る端をなすものは蓋し、流布本の末に附する

月かげは入る山のはもつらかりき
たえぬひかりを見るよしもがな

といふ歌にあるべし。この歌は新勅撰集に載する源季廣の歌にして長明の詠にあらぬは明かなれば、これが、この方丈記と離るべからぬものなりとせば、方丈記は長明の作にあらずといふべきに至るは必然の數なりとす。然れども、この歌の附載なき方丈記少からず。扶桑拾葉集所引の異本これなり、家藏の古寫片假名本これなり、又余等が古典保存會にて複製し、大正十五年四月に國寶に指定せられたる京都府船井郡高原村字下山の大福光寺に藏する古寫本これなり。以上いづれも、この歌の記入なきものなり。又前田侯爵家に藏せらるる室町時代の古寫本にはおなじく、この歌を記載せぬが、卷末二枚許の白紙をおきて空也和讃の一節を記せり。これを以て考ふるに、方丈記を熟讀したる人が、おのづから無

常を觀じたるあまりに、上の如き和歌和讃を記入せるものなるべきこと明かなりとす。されば、上述の歌の卷末に存することによりて方丈記を長明の作にあらずと論ずるが如きは、共に古書を談ずるに足らざるものといふべし。

方丈記の長明の作たることは十訓抄の文によりて明かなり。十訓抄が信ぜらるる以上は、その文によりて、方丈記が長明の作たることは否定すべからず。而してその文中に曰はく、

方丈記とてかなにて書置物をみれば、始の詞に行河のながれは絶ずしてしかももとの水にあらずといふ

川閲レ水以成レ川、水滔々而日度。世閲レ人而爲レ世、人冉々而行暮。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

（文選）

と云文をかけるよとおぼえていと哀なり。然而彼庵にもおりごとつぎ琵琶などを伴へり。念佛のひま〳〵には糸竹のすさびをおもひすてざりけるこそ、すきの程いとやさしけれ。

とあり。これを以て方丈記の長明の作たることは否定すべからず。されど、ここに今本は僞作にあらずやと思はしむる材料あり。そは異本と目せらるるもの二種世に傳はるによりてなり。一は故森洽藏氏の藏にして後東京帝國大學の藏となりし本にして、これには

寫本者

長享二年戊申十二月十三日於宇多橋西本願院拭老眼雖爲寒中禿筆手

龜鳥跡氷堅依爲大切寫之者也　　佛子奠源

又次云

于時天文八年己亥正月廿五日於柞原安樂院南窓書之　　隆　忱

又次云

右之本喜多院源春坊隆堅得也寫是之人々五字一類之御廻向奉憑者也

慶長二十年葉月下旬　　寶生院信盛書

とあり。而して森氏の寫本は慶長よりも遙に下れるものにして余は百年をも經過せぬ寫本と見たりしなり。他の一本は東京帝國大學國語研究室に藏したりし本にして、その奥書は

方丈記者是祇翁之所持以長明自筆卷物寫之畢誠筐中之重寶也

延德二年三月上旬　肖柏判

とあり。これも森本と甲乙なき程の寫本にしていづれもその奥書當時のものにはあらず。而してこの二本共に文章いたく流布の本と異にしてしかも頗る短き文なりとす。加之その二本亦文章異にして全く別種の本と目すべきなり。而してそれらの奥書によるときはいづれも信ずべきに似たりといへども、かの平家物語の大祕事に該當すべき平家物語補闕と名づくる書にて見る如く、南北朝以後往々古書の得がたき場合に何人か之に擬作して、以て自ら得々たる如き弊を見るものなれば、それらの異本も亦、これらの亞流ならずとは必せざるなり。この故に吾人は流布本方丈記の如きものが、決して僞書にあらざるべきは僞書說の勃興せし當時

より主張せしものなるが、しかも、積極的に立證せむには、その頃の古寫本を以てすべきものにして、その本の出でざる限りはただ推論を以てするの止むを得ざる弱點存せりしが、幸にして大福光寺本の出現により、流布本の如き方丈記が、長明の原作たりしことを積極的に立證し得られたるなり。

大福光寺本には年代を明記せるものなし。然れども、紙質、書體を以て推すに、長明の時代を降ること遠からぬものたることは否定すべからず。その奥に

右一卷者鴨長明自筆也

從西南院相傳之

寛元二年二月日　　親快證之

とあり。親快は當時の醍醐寺の僧なるが、この識語果して親快の自署なりや否や疑を存すべき點あるものなるが、それが信ずべきものとしてもなほ、この本を長明自筆とするは不當なりとす。何となれば、明かに書寫に基づく誤脱と認むべきもの存すればなり。然りといへども、長明の時を去ること四五十年をも下らざるべき時代の書寫と見ゆれば、今日に於いて方丈記の最も信憑すべき本としては之を措いて他に求むべきにあらざるなり。

さてここに立ちかへり僞作説を見るに、その説を主唱せる張本は故藤岡作太郎氏なりと認めらるるが、著者が藤岡氏在世の頃主張せしといふ

說を當時聞きしものと、その遺著に載するものとは異なる點ありて、遺著の方にはその項目の數減じてあるものなるが、それらにつきては既に內海弘藏氏が、その著方丈記評釋の序說中に論駁せられてあれば、吾人は今更蛇足を加ふる必要を感ぜず。要するに、かの遺著に載する程度の事を以て僞作說の成立するものとせば、世に存する著書の多くは大抵は冠履轉倒の詭辯を弄して僞書と論じ得べきものとならむ。これ蓋し、最初は異常なる見識にて大聲疾呼せしが、漸く反省するにつれて、その說の極端なるを自ら矯めたる如く見ゆるが、なほその僞作說を棄つること能はずしてかかる薄弱なる論據を固執せしものならむか。ことに藤岡氏が、流布本の方丈記の文を目して、後人が諸書の一部を飜餖補綴して作

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com